



トランスナショナルな身体 : メルヴィルの小説に見るその可能性と不可能性

西谷 , 拓哉

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 29:1-17

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81000853>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000853>



トランスナショナルな身体

——メルヴィルの小説に見るその可能性と不可能性——

西谷拓哉

近年、文学研究において「トランスナショナル」という言葉をよく目にするようになってきた。ここにはマルチカルチュラリズム、ポストコロニアリズム、そしてグローバリズムという現代社会の時流の影響がはっきり現れており、従来のようにインターナショナル、つまり二国間の関係というよりも、文学作品を多国間の交流関係の中に置いて考察しようとする傾向が見受けられる。厳密に調べたわけではないが、アメリカ文学研究にはとりわけこのような傾向が強く現れているように思われる。

十九世紀アメリカ小説において、トランスナショナリズムに結びつけて論じられることの多いのがハーマン・メルヴィルである。メルヴィルの小説は作家自身の旅や航海の経験を題材にしており、初期の『タイピー』（一八四六年）や中期の代表作である『白鯨』（一八五一年）に見られるように、人種、民族や国籍を異にする登場人物の接触がそもそも大きな特徴の一つとなっている（『白鯨』の乗組員たちの出身は十数カ国に及ぶ）。そこに昨今の動向が相俟って、越境や他者性という視点からの研究が増えてきているのである。本稿でもそのテーマに添いながら、しかし、もう少し話題を狭めて、

人間の身体感覚の共有、あるいは乖離という観点からメルヴィルの描くトランスナショナルリズム、ないしはトランスアトランティシズムを考察してみたい。というのも、人種、民族であれ国境であれ、何らかの境界を交差するような人間の実存、あるいは想像力のありようは、まずもって身体という最も素朴なレベルで現れると思われるからである。

1 アメリカン・ルネサンスとトランスナショナルリズム

具体的な作品論に入る前に、右で述べたアメリカ文学、より狭くはアメリカン・ルネサンスに関する研究の動向を大まかに振り返っておきたい。ここ数年の我が国のアメリカ研究で最も注目された著作の一つに、古矢旬『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナルリズム』（二〇〇二年）がある。この中で古矢はヨーロッパとアメリカの歴史的関係に注意を払いながら、合衆国の特質を次のように明快に説き明かしている。まず第一に、アメリカはヨーロッパ文明との連続性に立脚しているという自覚を持っていたが、同時にそれに対する批判と拒絶をも示してきた。つまり、アメリカには西欧との連続と断絶という二重の意識が併存していた。第二に、近代における西欧化とアメリカ化という現象は根本的に異なっている。前者はもっぱら非西欧世界への働きかけであったのに対し、後者は合衆国以外の世界への働きかけのみならず、非西欧からの移民を次々に取り込み、それをアメリカ化する、すなわちアメリカ国内をアメリカ化するという自己回帰的な要素を含んでいた。それは別の見方をすれば「アメリカの世界化」と言うこともできる。そうしてアメリカは世界各国から移民を受け入れるたびに社会のバランスをとりもどすべく自己調整に迫られてきた。このような「世界」の漸次的な包摂と自己調整の繰り返しにアメリカ史の本質的特徴があると古矢は言う。やがて第二次世界大戦後、アメリカは超大国として全世界に影響力を及ぼして、今度は世界をアメリカ化していく。そのような「世界のアメリカ化」は先に述べた「アメリカの世界化」を前提としていたのである（三一七—一九頁）。

「アメリカの世界化」があつてこそ「世界のアメリカ化」が実現したのだとする立論——あるいはレトリックと言つた方がいいかもしれないが——これは私のような文学畑の人間にとつても大変面白いものに感じられる。というのも、古矢の説明には二重の意味でトランスナショナル・アメリカが描き出されているからである。移民の到来・包摂・アメリカ化というプロセスに見られる超国境性と、アメリカがグローバル化していくときの超国境性である。アメリカにはこのように二種類のトランスナショナリズムが見られるのである。

右で見た第一のトランスナショナリズムは、マルチカルチュラリズムと言い換えてもいいかもしれない。一九八〇年代のマルチカルチュラリズムの台頭によつて、合衆国内の多民族・多人種的状况に対する意識は一段と先鋭になつた。そして、ロナルド・タカキの『別の鏡に映して』（一九九三年）やエモリー・エリオット編集の『コロンビア米文学史』（一九八八年）を代表とする、マルチカルチュラリズムに立脚したアメリカ史、アメリカ文学史の書物が陸續として現れ、それまで周辺に置かれていた少数派がいかに合衆国の社会と文化を創り上げることに貢献してきたのが明らかにされた。このような動きによつて合衆国を「トランスナショナル・アメリカ」として捉える見方が勢いづいてきたのである。ただし、トランスナショナルという言葉には、個々の民族や人種という構成要素が断片的に存在しているというよりも、それらの差異を超えて存在する、あるいはそれらのネットワークの総体としてのアメリカという、全体への志向がうかがえる。トランスナショナルという言葉は、インターナショナリズムを越えて、グローバルな関係の中で合衆国の歴史や文化を捉えようとするときにも使用される。ある歴史学者はインターナショナル・ヒストリーとトランスナショナル・ヒストリーの違いについて、前者は外交史、軍事史といった分野を先導する考え方であったが、トランスナショナル・ヒストリーは国境を越えて広がる、あるいは浸透しあう各種の現象を取り扱い、解釈の枠組みとしての国民国家、あるいは主体を形成するものとしての国民国家の優位性に疑問を呈するものであると述べている（シーゲル、六十三頁）。

このような見方が出てきた背景には、かつての帝国の支配的優位を突き崩そうとするポストコロニアリズムが活発になったことが挙げられる。そこでは、支配Ⅱ被支配といった単純な構図にのっとって支配される側の人々の主体が一方的に支配者によって決定されるのではなく、むしろ支配する側も支配される側によって自己形成されるのだという相互関係が重要視される。支配Ⅱ被支配という関係はけっして固定したものではなく、むしろ相互浸透的にアイデンティティに揺らぎを生じさせると考えられるのである。さらにはドナルド・ピーズら、ニュー・アメリカニストと呼ばれる研究者たちが行なっている一連のアメリカニズム批判も「帝国」としてのアメリカを歴史的、思想的に再検討し、その国家像の中にある亀裂や脆弱さ、あるいは異種混交性をあぶりだそうとする試みだと言える。ポストコロニアリズムは固定したナショナルリティというものに対する周辺・外部からの異議申し立てであり、ニュー・アメリカニズムは中心・内部からの異議申し立てだと考えることができる。

以上のような、マルチカルチュラル、ポストコロニアル、あるいはニュー・アメリカニスト的理解が、さらにグローバルリズムという社会動向と結びつき、合衆国の歴史をそれだけで単独に考えるのではなく、多国間関係の中で捉えようとする、国境を固定的なものではなく流動するものと見たりする意識が高まってきたのである。そのような中で、十九世紀アメリカ文学、とりわけアメリカン・ルネサンスをトランスナショナルな視線で考え直してみようとする機運も高まってきた。ただし、この場合、全世界的というよりは、環大西洋、トランスアトランティックという枠の中で論じられることが多いように思われる。もちろん、たとえば、メルヴィルにおけるマルケサス諸島や、マーク・トウエイン、ジャック・ロンドンにおけるハワイなど、太平洋地域との関連を考察する研究も多数存在するが、トランスアトランティックという視点が大きなかたまりを作っていることは間違いない。大西洋を挟んだイギリスやヨーロッパ大陸とアメリカ文学の関係、あるいはストウ夫人の場合などに特にそうだが、カリブ海地域、アフリカ大陸との関連も考察の対象にあげられてい

る。(註1)

トランスアトランティックなアメリカ文学研究の代表格としては、『大西洋を挟んだ反乱』(二〇〇一年)、『ヴァーチヤル・アメリカ』(二〇〇二年)を上梓しているポール・ジャイルズの名前を挙げる事ができる。前者はイギリスの作家がアメリカ独立革命をどのように見ていたか、また、この大西洋を挟んでの衝突によってナショナリズムとしての「アメリカ文学」の勃興がもたらされ、逆に敗戦の記憶を乗り越えるために「イギリス文学」が形成された過程を論じている。また、後者では、フレデリック・ダグラス、メルヴィルからナボコフ、ピンチオンに至るアメリカ作家とイギリス文化との接触、あるいは排除の関係を具体的にたどっている。ジャイルズは英米文学をけっしてポストコロニアル的な従属関係で捉えてはいない。同じく十九世紀の英米文学の関係を扱ったロバート・ワイズバックがアメリカ側の対抗意識とイギリス側の無視という図式で捉えようとするのに対して、両者がパラレルな関係の中で互いを鏡に映しながら自己形成していく過程を比較文学的な視点で追いかけるところに、ナショナリスティックな研究の枠を越えようとするジャイルズの特徴がある。

2 二重の手の幻想

先に本稿の目的はメルヴィルの描くトランスナショナルリズムを身体感覚というアプローチで捉えてみることだと述べたが、その観点からまず思い出されるのはやはり『白鯨』におけるイシユメールとクイーケグの関係である。クイーケグと一つのベッドで寝ることになったイシユメールは、翌朝目覚めたとき、その腕にかき抱かれているのを知り、「奇妙な感覚(My sensations were strange.)」(第四章、二十五頁)(註2)に捉えられる。幼いときの、ある記憶がよみがえったからだ。

イシユメールは物語開始早々、自分は憂鬱症にかかっており、我知らず葬列の最後について歩いたり、通行人の帽子をたたき落したいという衝動にかられたりすると言うのだが、ここには明らかに世の中と自分との間の不和が語られている。その不和はもともと継母との関係から生じたものである。幼いイシユメールは母親によって寝室に閉じこめられる。暖炉の煙突の中を昇ろうとした罰である。それだけでなく日頃からイシユメールは継母から鞭打ちや食事抜きを罰を受けていたが、今回は午後二時から翌朝まで謹慎させられるという苦行であった。このときイシユメールは不思議な体験をする。悪夢にうなされたまどろみから目覚めると、真つ暗闇の中で自分の手の中にもう一つ、超自然的な別の手があるように感じて恐怖に駆られるのである。

先ほどまで日が射していた部屋は夜のとばりに包まれていた。とたんに、戦慄が全身を貫いた。何も見えず、何も聞こえなかったが、ただ何か超自然的な手が私の手の中に置かれているようなのだ。私の片腕は掛けぶとんの上に出ていたが、名状しがたい、想像しがたい、物言わぬ姿が、まぼろしが、ベッドの横に寄り添うように座り、私の手の中に手を置いているのである。太古の昔からと思えるほどの長いあいだ、私はベッドで横になったまま、恐怖のあまり身を凍らせ、手を引つ込める勇氣もなく、それでいて手をほんの一インチでも動かすことができれば、この恐るべき呪縛から逃れることができるのにと、ずっと考えていた。この意識からどのようにして脱け出したかはわからなかったが、翌朝目覚めると、私はそのすべてをおぞけをふるいながら思い出し、その後、何日も、何週も、何カ月も、その神秘を解明しようと試みたが無駄だった。いや、これを書いている今に至るも、しばしば私はあの神秘に頭を悩ませているのだ。(同、二十六頁)

この「超自然的な手」を、自分の身体における現実と幻想の不調和な乖離と見るべきか、あるいは自己と他者の神秘的な身体的接触ととるべきか(後者はモービー・ディックという圧倒的な存在との邂逅の予表とも言える)、いずれにせよこ

ここには二重の身体という感覚が生じている。このような身体的失調は幼いイシユメールにとって強烈な体験であったはずで、成人したイシユメールが周りの世界に対して抱く違和感の原点になっているように思われる。

しかし、その身体的な違和感はいくエグとの邂逅によって消え去る——いや、消えないまでも、別の身体感覚に取って代られる。最初の晩、すでに潮吹き亭のベッドに入っているイシユメールは戻ってきたクイーケグの奇怪な入れ墨をじっと見つめていた。暗い部屋の中でベッドに入ったイシユメールが、不気味な他者の身体を目撃するという構図は幼い頃の体験と同一である。しかし、幼い頃の体験では消えがたい違和感が残ったのに対し、クイーケグとの場合では次第に溶け合う感覚が生じてくるのである。というのも、二日目の夜、宿屋でクイーケグと二人きりになったイシユメールは、またもや奇妙な身体感覚を経験する。

私は今は二人だけのさびしい部屋に座っていた——はじめこそ威勢よく燃えて部屋の空気を暖めていた暖炉の火も、今はただ目を楽しませるためだけに燃えているといった、おだやかな燃焼の段階に達し、窓辺には夕べの影やまぼろしが忍び寄り、無言のままの孤独な二人連れをのぞきこんでいた。外では嵐が轟々と荘厳な音を立てていた。このとき私は奇妙な感覚を覚えはじめた。身体の内部で何かが融けていく感じ。ささくれたわが心も、憤怒に燃えるわが手も、もはや豺狼の世界に反抗することもない。この心なごませる蛮人がそれをあがなってくれたのだ。(第十章、五十一—五十二頁)

今度の「奇妙な感じ (strange feelings)」は、幼い頃の凍りつくような恐怖 (“I lay there, frozen with the most awful fears”) とは対照的に、あたかも氷が融けていくようなものとして捉えられている点が興味深い。この箇所ではイシユメールは意識の中で自分とクイーケグの身体を並べているが (“us, silent, solitary twain”)、まったく異質な身体が並んでいるにもかかわらず、そこには両者が溶け合うような感覚が生じている。この感覚は第九十四章で乗組員たちが鯨の脳

油をしぼる箇所にも顕著に見られるものである。そこでイシユメールは同僚の手を脳油のかたまりと間違えて揉みしだきつつ、全員が脳油の中に溶け出して他我の別なく混ざり合うという狂おしいまでの官能的な幻想に浸るのだが、このようなトランスナショナルな融合の根底には、イシユメールとクイーケグをつなぐ身体的な共感覚が存在しているのである。

しかしながら、二人の關係に非対称を見ることもできるかもしれない。たとえば福岡和子は『白鯨』の陸上部分に関して、イシユメールとクイーケグは対等の關係ではないとしている。イシユメールは「クイーケグから言葉を奪い、クイーケグを利用して、自ら『物語』を作った」のであり、そのとき「クイーケグは、一人の独立した『他者』であるよりは、イシユメールの思い描くヴィジョンが投影された、実体を欠いた空疎な人物であると言っても言い過ぎではない」（三十五頁）。その一方、海上部分ではクイーケグをはじめとする非白人種の肉体的躍動が克明に描かれており、「言葉を越えた、したたかな存在感を感じさせている。これこそがメルヴィルなりの『民主主義宣言』だ」（四十一頁）と福岡は述べている。たしかにそれはそうなのだが、私はこのクイーケグの肉体はクイーケグだけのものではなく、イシユメールにも共有されているものだと考えたいのである。クイーケグが鯨に囲まれながら、鯨の脂身に吊上げるための鉤をかける場面があるが、滑り落ちないようにクイーケグの腰にはロープが結わえてあり、その一方の端はイシユメールのベルトにつながれている。「もしクイーケグが海中に没すれば、慣行と名誉が求めるところにより、ロープを切断するのではなく、相棒の跡を追って引きずられてゆくのが私のさだめなのである。つまり、われわれは長い靱帯によってシャム双生児なみに結合されているのである」（第七十二章、三三〇頁）。このロープはいわば象徴的な臍の緒である。この最も根源的な身体をつながりの中に「メルヴィルの異種混交に関する哲学の実践がある」（マー、一四一―二頁）と見なすことができるのではないだろうか。

3 イギリスとアメリカのディプティック

ところが、『白鯨』以降の作品になると、イシュメールとクイーケグの例に勝るようなトランスナショナルな身体感覚はなかなか見つからない。しかし、後期のメルヴィルにはイギリスを舞台にした小説がいくつかあり、トランスアトランティックな身体という観点から考えようとしたときに興味深い事例を提供してくれるのである。メルヴィルの作品中、イギリスを舞台にした主なものは以下の通りであり、一八五一年以降の小説の中で割合と大きなクラスターを作っている。

『レッドバーン (Redburn)』(一八四九年)

「貧者のプディングと言者の食べ残し (Poor Man's Pudding and Rich Man's Crumbs)」(一八五四年六月、『パトナムズ・マンスリー・マガジン』に掲載)

「二つの教会堂 (The Two Temples)」(一八五四年七月、『パトナムズ』に原稿を送るも不掲載)

「独身者たちの楽園と乙女たちの地獄 (The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids)」(一八五五年四月、『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』に掲載)

『イズリアル・ポッター (Israel Potter: His Fifty Years of Exile)』(一八五五年)

『ビリー・バッド (Billy Budd, Sailor)』(一八九一年草稿、一九二四年出版)

この中の三つの短篇は研究者の間でディプティック (diptych) と呼ばれている。ディプティックとは二枚折りの絵という意味で、二枚の絵が屏風のように合わさって一枚の絵を形作るように、これらの短篇では二つの話がペアになり一つの作品を形成するわけである。そして、各々のペアはアメリカを舞台にした短篇とイギリスを舞台にした短篇からなっており、大西洋を隔てた両国を二つ折りの絵にするという特異な構成を持っている。

これらの短篇で興味深いのは、語り手がアメリカとイギリスで味わう身体感覚、ないしは身体的経験の違いである。語り手の職業や貧富の程度は作品によってさまざまだが、イギリスを舞台とする短篇ではいずれの語り手も、良い意味でも悪い意味でも集団や群衆と混じり合うことになる。たとえば「独身者たちの楽園」では語り手はテンプル法学院の弁護士たちと優雅な会食を楽しみ、オックステイル・スープに始まり、ヒラメ、ローストビーフ、マトン、七面鳥、チキン・パイ、プディングと続く料理を堪能する。この食事場面には当然のことながら、読者の味覚を刺激するような、「豊かなさび茶色の (of a rich russet hue)」(三二〇頁) というスープについての色彩描写や、ヒラメについての「雪のように白く、薄じくりで、ゼラチンをほどよく含み、かといって亀の肉のようにねっとりしすぎでない」(snow-white, flaky, and just gelatinous enough, not too turtleish in its unctuousness)」(同) といった感覚表現が多用されている。

一方、「富者の食べ残し」では語り手はロンドン市庁舎で行なわれた大宴会の残り物を乞食たちに提供する「チャリテイ」を見物に行くが、食べ物に殺到する群衆の波に巻き込まれ、ほうほうの体で宿に戻る羽目になる。この短篇で興味深いのは、語り手が見張りの警官から乞食の一人と間違われることである。群衆に揉まれて、語り手の帽子は押しつぶされ、上着も汚れてぼろぼろになっていたのである。短篇の最後でも、案内役の友人は御者に対してわざわざ「この方は紳士だからな、いいな」(三〇一頁) と念を押している。逆に言えばそれほど浮浪者と見分けのつかない格好になっていたということであり、先の警官の間違いともあわせ、語り手の身体とロンドンの浮浪者たちの身体とが会場の雑踏の中で一瞬、交差し融合したことを物語っている。

「二つの教会」のロンドン編でもまた、語り手とロンドンの群衆との関わりがある種の身体感覚を伴って描かれる。ある事情で一文無しになった語り手は、劇場にも入れずにいたところ、ある労働者に半券を譲ってもらうことになる。その親切を受けたとき語り手は「左目に奇妙な感覚 (a queer feeling in my left eye)」(三二二頁) を覚えるのである。お

そらく涙があふれてきたのだろう。語り手は「たいいていの人の場合と同じで、左目のほうが弱いのだ。心臓（ハート）と同じ側にあるのだから」（同）と述べている。あるいはまた、天井棧敷——そこには職人やそのおかみさん、悪ガキたちがひしめいている——に上がった語り手は、貧しい身なりの少年からビール（a small mug of humming ale）をふるまわれる。少年は自分の父親が一山当てるためにアメリカに行っており、そのよしみからだと言うのである。そのビールの形容として使われている「プツプツと泡立つ（humming）」（三二四頁）という言葉はほんの些細な、紋切り型の表現だとはいえ、少年と語り手の偶然の交歓を的確に伝えるものとなっている。

このように、イギリスを舞台とする短篇ではいわば他者に対して開かれた身体感覚が随所に見られるのだが、一方のアメリカを舞台にした短篇では語り手の身体はむしろ閉ざされたものとなっている。「貧者のプディング」では語り手はある詩人に勧められ、貧しいアメリカの農家を訪れ、昼食をもてなしてもらうが、お米で作ったプディングはあまりの黴臭さにほとんど語り手の喉を通らない。語り手はそのことに、興味津々で出かけていった自分のあさはかさとうしろめたさを覚えることになる。

「乙女たちの地獄」はニューイングランド山中の製紙工場が舞台だが、それは狭いふいごのような峡谷を下った先の「悪魔の土牢」と呼ばれる窪地にあり、「雪に閉ざされ、霜に覆われて、石造りの埋葬所（snowed upon, and frost-painted to a sepulcher）」（三二七頁）のように見える。その陰鬱な様子と、そこで働く娘たちのあまりの生気のなさに寒気を覚えた語り手は、「外套と襟巻きにすっぽり身を包み、大きなアザラシ皮の手袋に両手を入れて（remuffling myself in dread-naught and tippet, thrusting my hands into my huge seal-skin mittens）」（三三五頁）、ふたたび山を上り、帰途につく。ここに引用した短い一節からだけでも、外界と語り手の身体の双方における閉鎖性は容易に見て取れよう。「二つの教会堂」では、ニューヨークのゴシック教会の塔に忍び込んでいた語り手は、鍵を閉められ、文字通

り教会堂の狭い密室に閉じこめられてしまう。

以上、各々のディプティックをばらばらに分けて瞥見したが、これらの短篇は本来はペアとなるセクション同士が互いに相手を照らしあつて、アメリカとイギリスのそれぞれに見られる貧困や搾取といった社会病理を浮き彫りにする仕掛けになっているのである。しかし、こうしてイギリス編とアメリカ編に再編した上で比較してみると、イギリス編の方に（食べ物や飲み物に関わる）より豊かな身体感覚があるのに対し、アメリカ編の方にあるのは、特に「乙女たちの地獄」に顕著に見られるように、空虚さや不毛性、閉鎖性といった負の身体感覚である。それによってメルヴィルはアメリカの病理をむしろ強調して描いていると言えるだろう。

4 変装とナシヨナル・アイデンティティ

次に長篇に目を移し、『イズリアル・ポッター』における身体を検討してみたい。この小説は、アメリカ独立革命に参加した主人公が英国軍に捕虜として捉えられ、何度も脱走してアメリカへの帰還を試みるが、そのたびに失敗し、ついにはロンドンの裏町に住みついて、妻をめとり、十一人の子どもをもうけ、やがて老人となって五十年ぶりに故国アメリカへ戻るといふ物語である。

イズリアルは脱走に際して、必ずと言っていいほど変装する。もちろんヤンキーと見破られないためである。最初の脱走では溝掘り人足の老人と服を交換し、まるで八十歳の老人のような姿になる（第三章）。それを皮切りに、イズリアルは変装に変装を重ねていくのである。あるときイズリアルは親米派の地主であるウッドコックの屋敷にかくまわれるが、ウッドコックはイズリアルを隠し部屋に通したまま、その後いくらたつても顔を見せない。ウッドコックは急死していたのである。どうやって怪しまれずにその屋敷を出たものか苦慮した末、イズリアルはウッドコックの服を身につけ

るのだが、その結果、屋敷の者にウッドコックの幽霊と間違われてしまう。街道に出たイズリアルはそのままの恰好でいると正体がばれるため、それを脱ぎ捨て、今度は案山子の服を着る羽目になる（第十三章）。

このような変装、変身は、たとえばトウエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八四年）にも見られるように逃亡劇につきもののモチーフだが、イズリアルの脱走が成功するためにはいかに彼がイギリス人になりきることが鍵となる。ところがイズリアルはどんな変装をしても必ずすぐにアメリカ人と見破られてしまうのである。むろん、変装とその露見の連続はストーリーを持続させるための物語上の要請ではあるが、そこにあるナショナルリスティックな意味合いを見逃すことはできないだろう。すなわち、イズリアルはあくまでイギリス側と戦っているアメリカ兵であり、それがやすやすとイギリス人になりうるということはナショナル・アイデンティティの存立根拠が失われてしまうことになるのである。つまり、イズリアルは生き延びるために変装し、アメリカ人からイギリス人へなりすまそうとする——いわば「トランスアトランティックな身体」を獲得しようとするのだが、けっしてそれを与えられることはない。それはイギリス対アメリカの戦争を扱う小説のイデオロギー的な要請でもあるだろう。

しかし、ひるがえって、それではこの小説の中で明確なアメリカン・アイデンティティが身体的に与えられることがあのかと考えてみると、どうもそれは疑わしい。小説の終盤でイズリアルは捕虜となっている独立革命の英雄イーサン・アレンに遭遇する。そのアレンの描写は次のようになってい

アレンは、ヘラクレスとジョー・ミラーとバイールとトム・ハイヤーを奇妙にも組み合わせたような人間であったと思われる。体軀はベルギーの巨人のようで、内なるところにはスイス人のように山の音楽を持ち、心はクール・ド・リヨンのように大きく膨らんでいる。ニューイングランドに生まれながら、その特徴を何ら見せない。率直で、ぶっきらぼうで、朋輩つき合いのいい

ことは《異教徒》のようで、ともに浮かれることはローマ人のようだし、元氣一杯、腹一杯のことは《秋の刈り入れ》のごとくだ。彼の精神は本質的には西部人だった。この点にこそ、彼特有のアメリカニズムがある。西部魂こそが真のアメリカ精神だし、未来に向かつててもそうであろう（他にアメリカ精神を表すものはないし、またありえないだろう）。（第二十二章、一四九頁）

引用の最後でアレンの西部魂が真のアメリカニズムとして称えられるとはいえ、しかし、前半ではギリシャ神話のヘラクレス、イギリス人俳優のジョー・ミラー、フランスの騎士バヤール、ベルギーの巨人、獅子心王ことリチャード一世などに喩えられており、ニューイングランドに生まれたがその印はないとあるように、アレンの人となりアメリカの固有性は薄い（ハイヤーのみアメリカのボクサー）。それともこの多民族性こそがアメリカの印とでもいうのだろうか。だとすればメルヴィルのナショナル・アイデンティティに対する意識はすいぶんと時代を先取りしていたことになるが、しかし、このような人物造型はむしろアメリカン・アイデンティティの不在の表象と受け取った方がいいだろう。

独立革命のもう一人の英雄ポール・ジョーンズの場合はどうだろうか。ジョーンズは非常に勇猛果敢な戦士として描かれているが、その描写にも非アメリカ的な要素が入り込んでいる。イズリアルは密使として、パリにいるベンジャミン・フランクリンのもとを訪れ、そこでジョーンズに紹介されて、その晩、ジョーンズと同じ部屋で寝ることになる。ベッドに入ったイズリアルが寝たふりをしてジョーンズの様子をうかがうと、袖をたくし上げた右腕の内側一面に、船乗りがよくするようなものではなく、ニュージージーランドの戦士がするような「濃い青色の、複雑で、迷路のような、秘教的な」入れ墨があるのを発見して驚くことになる（第十一章、六十二頁）。

これはまさにイシュメールとクイークエグの寢室の場面の再現であり、ジョーンズにおけるトランスナショナルな身体の顕現の瞬間である。しかし、『白鯨』の場合と異なっているのは、相対しているのが同国人であるがゆえに、なおさら

「文明、非文明に関わりなく、人間の性に眠っている原始的な野蛮さ (the primeval savageness which ever slumbers in human kind, civilized or uncivilized)」(同、六十三頁)が露わになるといふことである。そしてさらにジョーンズはアメリカという国家の代理表象としても使われている。

アメリカは英国と同じ血を分けながら、それでも二度の戦争で立証済みの仇敵となり——心底では旧怨を忘れる気質も必ずしもないようであり——剛勇で無節操、無謀で掠奪的、涯てしない野望を抱き、外面は文明化されながら心では蛮族——このようなアメリカは諸国のうちのポール・ジョーンズである。あるいは、いつそうなるかもしれないのである。(第十九章、一二〇頁)

トランスナショナルな身体とは本当ならば他の民族、人種に開かれたものであるはずだが、ポール・ジョーンズのそれは他者との融合の方向とは逆に、むしろ他者を滅ぼす凶暴さを秘めた身体として機能しており、ここにもまたメルヴィルのアメリカン・アイデンティティへの不信感を読み込むことができるのである。

『白鯨』がトランスナショナルな身体の可能性に対するロマンティックな希望であるとすれば、『イズリアル・ポッター』は皮肉にもトランスナショナルな身体の可能性を表している。メルヴィルは何事によらず物事の両極を激しく往復する作家であるが、以上のような、身体表現について見てきた振幅は、メルヴィルの小説の豊かさであると同時に、人は果たしてトランスナショナルたり得るか、果たして本当にトランスナショナルな身体を獲得することができるのかという根源的な問いを我々に突きつけるものでもある。それはメルヴィルの生きた十九世紀アメリカの課題であったというにとどまらず、今日もなおトランスナショナル리티という事態そのものにまつわる難問であり続けており、そこにメルヴィルの小説を身体という観点から読み直すことの現代的意義の一端があるように思われる。

(本稿は、二〇〇七年五月十九日、日本大学において開かれた日本ナサニエル・ホーソーン協会第二十六回大会におけるシンポジウム「アメリカン・ルネサンスとトランスナショナルリズム」での口頭発表に加筆したものである。)

註

1 二〇〇六年にオックスフォード大学で“Transatlanticism in American Literature: Emerson, Hawthorne, and Poe”という大きな国際大会が開かれ、「大西洋兩岸の作家たちの交友と誤解」、「十九世紀アメリカ作家のイギリス、あるいはヨーロッパ理解、逆にヨーロッパ作家のアメリカ理解」、「英米の文化人たちの植民地的関係」等々のテーマから十九世紀英米文学における英米、あるいは欧米間交流の諸相が論じられた。

2 以下、本稿でのメルヴィルからの引用はすべてノースウエスタン版により、長篇は章数と頁数を、短篇は頁数のみを括弧内に入れる。引用の訳は、『白鯨』については八木敏雄訳(岩波文庫、二〇〇四年)、『イズリアル・ポッター』については坂下昇訳(『メルヴィル全集』第十巻、国書刊行会、一九八二年)に基づいて、筆者の自由な変更を施したものである。

引用および参考文献

- Giles, Paul. *Transatlantic Insurrections: British Culture and the Formation of American Literature, 1730-1860*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2001.
- . *Virtual Americas: Transnational Fictions and the Transatlantic Imaginary*. Durham: Duke UP, 2002.
- Marr, Timothy. “Without the Pale: Melville and Ethnic Cosmopolitanism.” Ed. Giles Gunn. *A Historical Guide to Herman Melville*. New York: Oxford UP, 2005.
- Melville, Herman. *Israel Potter: His Fifty Years of Exile*. Ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston: Northwestern UP and The Newberry Library, 1982.

- . *Moby-Dick or The Whale*. Ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston: Northwestern UP and The Newberry Library, 1988.
- . *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford, Alma A. Macdougall, and G. Thomas Tanselle. Evanston: Northwestern UP and The Newberry Library, 1987.
- Siegel, Micol. "Beyond Compare: Comparative Method after the Transnational Turn." *Radical History Review*. 91 (Winter 2005): 62-90.
- Weisbuch, Robert. *Atlantic Double-Cross: American Literature and British Influence in the Age of Emerson*. Chicago: U of Chicago P, 1986.
- 福岡和子 『「他者」で読むアメリカン・ルネサンス——メルヴィル・ホーソン・ポウ・ストウ』(世界思想社、二〇〇七年)
- 古矢 旬 『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナルリズム』(東京大学出版会、二〇〇二年)